

# 中国古代鎮墓獸の基礎的研究（二）

——Ⅱ類「蹲踞型」・Ⅲ類「伏臥型」鎮墓獸の編年を中心に——

張 成

## はじめに

鎮墓獸は中国古代墓葬の典型的な副葬品である。漢代<sup>1)</sup>から隋唐に至る長期間にわたり多種多様な鎮墓獸が創出され、中国南北を貫く広域で流行を見せた。鎮墓獸の形態は、時代と地域の変化を敏感に反映しており、墓葬の年代を推定する尺度として活用しうるとどまらず、当時の墓葬文化や地域間交流、さらには王朝交替や民族移動の解読にも重要な役割を果たしうるといえる。

しかし、このように多大な可能性を秘めた鎮墓獸は、考古学界では年代決定の参考資料として重視されてきたものの、それらを主対象とする検討は決して多くない。また美術史学において、用途や機能、美学的・文化的意味などの解読に努力が注がれてきたが、文献史料がほぼ皆無であるため、史料に依拠するアプローチには大きな限界がある。さらに言えば、鎮墓獸についての総合的研究は無論のこと、そのための必須の基礎作業となる資料の収集整理すら、十分に行われていないのが現状である。

筆者は、鎮墓獸資料の集成・分類・編年という基礎作業こそが、鎮墓獸研究を推進するための必須かつ喫緊の課題であると確信している。現在筆者は、そうした基礎作業に傾注しつつ、中国古代鎮墓獸の編年体系の構築に主眼を置いた研究を進めている。前稿では、体躯の姿勢を基準にⅠ類「四足歩行型」・Ⅱ類「蹲踞型」・Ⅲ類「伏臥型」の計3類に分類し<sup>2)</sup>、その上でⅠ類「四足歩行型」鎮墓獸の編年案を提示した。Ⅰ類「四足歩行型」が漢代に出現し、三国・西晋・南朝と時代が降るにつれ、西北地区から中原地区へと拡散し、さらに漢水流域を介して南方の長江中・下流域に伝播したことを明らかにした（張成 2013）。本稿では、Ⅱ類「蹲踞型」とⅢ類「伏臥型」の鎮墓獸の編年と分布の分析結果を提示したい。

## 1. 「蹲踞型」・「伏臥型」鎮墓獸に関する先行研究

「蹲踞型」と「伏臥型」鎮墓獸に関する研究は、考古学と美術史学の二分野にほぼ限られている。以下、両型式に関する先行研究を概観し、研究の到達点と課題を明示する。

### (1) 考古学からの研究

楊效俊は東魏・北齊の鎮墓獸を人面のものと獸面のものに分け、さらにそれらの脚部に着目してA型とB型に細分した。人面A型は脚部が人の指のような5本のものであり、人面B型は脚部が馬の脚に似ている。また、獸面は人面と同じ標準で型式分類を行った（楊效俊 2000）。興味深い視点ではあるが、各時期の鎮墓獸を詳細に観察すると、馬や牛のような丸い脚もあれば、蹄の本数も3本

であったり5本であるなどまちまちで、明確な規範は認められない。したがって、脚部に基づく分類は十分ではない。その他、魏青利も東魏・北齊の紀年墓から出土した陶俑を対象に、その陶俑の形状から4つの地域区分を実施し、次いで各地域の資料の型式分類を行っている。結果的に魏の分類は楊の分類に類似したものになっている（魏青利2007）。

また倪潤安は、北周の鎮墓獸を角の有無を基準に分類した。すなわち、有角のA類と無角のB類に二分し、前者は独角から2本の角へと変化し、後者は頭を下げたものから上げたものに変化すると論じた（倪潤安2005）。さらに倪は洛陽期の北魏の鎮墓獸についても分類を行った（倪潤安2010）。人面と獸面に二分する案に異論はないが、背上の角の変化から時期的変化を導出する見解には問題があると考えられる。前稿および本稿の作業結果から明らかなように、北朝に限らず鎮墓獸の角は複雑であり、現状ではそこに規範を見出すことはできない。したがって倪の案には首肯できない。

## （2）美術史学からの研究

美術史学における先行研究としては、吉村菫子の研究が特筆される。吉村は「楚墓鎮墓像<sup>3)</sup>の成立と展開」（吉村1993）を皮切りに、後漢墓から魏晉墓において流行した鎮墓像を論じた「独角系鎮墓獸の系譜」（吉村2003）、広い視野から鎮墓獸の系譜について検討した「中国墓葬における人面・獸面鎮墓獸と鎮墓武士俑」（吉村2013）など、次々と鎮墓獸の研究成果を公表してきた。筆者の鎮墓獸分類は、吉村の諸論考に示唆されるところが大きい。

この他、室山留美子は、北朝・隋唐墓の人頭・獸頭獸身像（本稿のⅡ類「蹲踞型」に相当）を考察し、計17類型に分類した（室山2003）。その分類はかなり詳細であるが、統一的な分類基準がなく、また編年に基づく時間的・地域的検討が不足している点は遺憾である。

近年では、小林仁による一連の論考が注目される。小林は、「蹲踞型」鎮墓獸が平城期の北魏で誕生し、遷都後の洛陽で定型化した鎮墓獸の型式が、以後も基本的に踏襲されていったと論じた（小林2006）。また、北齊の俑を鄴と晋陽の二大様式に分け、前者の鎮墓獸は東魏の末、鄴城地区の基本型式を踏襲していると論じた。さらに、両様式の異同についても検討した（小林2008）。本稿の分類・編年案は、小林の検討に負うところが少なくない。

以上の概観から窺えるように、これまでⅡ類「蹲踞型」・Ⅲ類「伏臥型」鎮墓獸に関して、本格的な分類も編年もなされつつあるとは言え、いまだ十分とは言いがたい。墓葬や陶俑の研究における付随的な考察や、発掘調査報告書における解説的な考察が散見するものの、特定の墓葬や特定の時代・地域の鎮墓獸に検討が限定されているため、それらの全容が捉えにくい憾みがある。鎮墓獸研究を本格的に始動させ、その歴史的意義を解明するためには、総合的な分類と編年が不可欠なのである。

このような問題意識から、本稿ではⅡ類「蹲踞型」・Ⅲ類「伏臥型」の鎮墓獸の分類・編年作業を基軸に据えて検討を実施する。

## 2. Ⅱ類「蹲踞型」鎮墓獸の分類

Ⅱ類「蹲踞型」鎮墓獸は、膝を折り腰を落とし、両前足を地面に付けた姿態を呈し、台座に乗る。人面と獸面のペア配置が定式化している。従来、人面と獸面の違いが分類の第一基準とされてきたが、頭部の相違を除けば両者の形状はほぼ同一であり、編年や系統を考える上では、頭部形態の相違を

過剰に重視するのは妥当ではない。筆者は、まず体躯の全体的形状から A 類～ E 類の計 5 類に大分した上で、ほとんどは頭部の違いから人面 (a) と獣面 (b) に細分できる。すなわち、本類は以下のように分類できる (編年図)。なお、<sup>たてがみ</sup>過渡型 A I、A II は後述の第 4 章で説明する。

- (1) **A 型** 体の重心はやや前向きで、<sup>たてがみ</sup>鬣が欠損している場合が多いが、本来 4 本配していた。
- ① **Aa 型** 人面である。頭部に鬣状の角 (帽子?) がある。首から背中にかけて、5 個の長方形の柄穴があり、上の四穴には鬣を挿し、下の一穴には尾を挿したと推測できる。黒褐釉を施し、顔面に白粉を塗り、体には白い鱗片が描かれている。高さは 34cm (編年図 19、以下同様。なお、同墓から出土した 2 体一對の鎮墓獣は、同一番号で表す)。
- ② **Ab 型** 獣面である。口を大きく開き、威嚇し咆吼する相を呈している。首から背中にかけて 4 個の柄穴があり、もともと鬣があったはずである。虎文が全身に施される。高さは 30cm (21)。
- (2) **B 型** 脚が細く、鬚や髪が長く垂下する姿は、他の類型とはっきり区分できる。脚先は A 型と異なり、蹄形でなく獣形を呈する。
- ① **Ba 型** 人面である。頭頂に三角形の尖頂帽を被るものが主流であるが、晩期になると円柱形の装飾に変化する。高さは 25～30cm ほどである。時期的変化を考慮して、以下の 4 式に細分できる。
- 1 式 体が後方に傾き、顔は上を仰ぎ、口を大きく開く (23 左)。
- 2 式 体が前方に傾く姿勢に変化する。顔はいくぶん上向きであり、口を「へ」字状に閉じ、眉間は「V」字状を呈する (24 左)。
- 3 式 体はおおよそ 2 式に似るが、長髪がもつれて、体表に卷毛飾が出現する (25 左)。
- 4 式 3 式に似るが、従来の三角形帽子が円柱形に変化する (26 左)。
- ② **Bb 型** 獣面である。口が大きく開き、長い舌を伸ばす姿は、他の類型と区別できる。時期的変化を考慮に入れて、以下の計 5 式に細分できる。
- 1 式 首と背中に 4 つの鬣を配する (22 右)。
- 2 式～5 式 鬣は 3 本になり、これが定式化する。姿勢の変化の方向は Ba 型 1 式～4 式と同様である。大きく開口するものから、小さく開口するものへと変化してゆく。それに応じて、舌も次第に短くなってゆく (23～26 右)。
- (3) **C 型** 脚は B 型より太く、胸を前方に突き出す形状は他の類型と明確に区別できる。脚先は獣形を呈する。尾は A 型と B 型よりも長く、背中に沿って上がり、鬣と整然と並ぶ。高さは 30～50cm ほどである。
- ① **Ca 型** 人面である。丸顔である。禿頭に大きな耳と小さい円柱状の突起がある点は、他の人面鎮墓獣と明確に区別できる。
- ② **Cb 型** 獣面である。口吻が短く、口はほとんど閉じている。この点で、大きく開口する A 類および B 類の獣面とかなり異なる。なお、Ca 型と Cb 型は頭部表現が異なるほか、変遷の状況はほぼ一致するため、単独に分式しない。時期的変化を考慮して、以下の 3 式に分けうる。
- 1 式 角が細く、頭頂より下に配される (31・27 右)。
- 2 式 角が太く、身体とバランスを欠くほど巨大化している (32 右)。
- 3 式 角が 2 式よりやや小さくなる一方、首に粗大な戟角が付く (33 右)。

なお人面は、2式は漢民族の顔に似るが、3式では胡人のような顔に変化している。

- (4) **D型** 形はC型に類似するが、脚先は蹄形と獣形が併存する。尾と鬣はC型のように整然としておらず、分岐化と多角化の傾向が見て取れる。
- ① **Da型** 人面である。C型のような禿頭ではなく、尖った兜を被り鬚を生やす。
- ② **Db型** 獣面である。口を大きく開き、尖った耳をそばだてた姿をしており、胸の両側に雲気文様を配する点などは、他の類型と区別できる特徴といえる。Da型とDb型の変遷の状況は、顔面を除けばほぼ一致するので、単独に分式しない。どちらとも、時期的変化を考慮して3式に分けうる。
- 1式 人面・獣面ともに、背中に短く太い3本の鬣が付く (34・35)。
- 2式 尖った兜から小戟状の突起が延びる。人面・獣面ともに背中に細い鬣を多く配する (36)。
- 3式 3本の鬣は分岐しつつ大型化し、頭部を超える (37)。
- (5) **E型** 他の類型と同様に蹲踞の姿勢を呈するが、前脚と後脚の間隔が狭く、体は丸みを帯びて肥満体である。背中の鬣がなく、尾だけが付く。早・中期の台座がない形は、他の類型と異なる。
- ① **Ea型** 人面である。目が細く、頭部にやや高い鬚状のものが配される。
- ② **Eb型** 獣面である。頭頂に2本の小さな角が付き、高さは20～25cmほどである。人面・獣面の変遷は顔面を除いてほぼ一致するため、単独に分式しない。人面・獣面ともに、時期的変化を考慮して、2式に分ける。
- 1式 台座に乗らないもの (13・14)。
- 2式 台座に乗るもの (15)。

### 3. Ⅲ類「伏臥型」鎮墓獸の分類

Ⅲ類の「伏臥型」鎮墓獸は、Ⅱ類の「蹲踞型」の姿勢と異なり、腹這いで匍匐する姿勢を呈する。また、おおむね台座に乗るⅡ類と違い、台座の有無がはっきりしない。Ⅲ類の「伏臥型」の鎮墓獸は、体躯の特徴などから、A・Bの2類に分けうる。

- (1) **A型** 背中に角状の鬣や高い背鰭が付き、1基2体の獣面のペアとして配置される (現状では、人面は見当たらない)。獣面のものは、形が大体同じである。身長は22～27cmほどである。時期的変化を考慮して、2式に分ける。
- 1式 角状の鬣が付く (3)。
- 2式 体は1式より大きくなり、角状の鬣が高い背鰭に変化している (4)。
- (2) **B型** A型のような高い角状の鬣や背鰭がなく、頭部には目立たない角や低い背鰭が付く。また、2体の獣面が組み合わさるA型と異なり、Ⅱ類「蹲踞型」と同じように獣面・人面がペアになって配置される。ただし、台座には乗らない。本類型は頭部の違いにより、人面 (a) と獣面 (b) に分けうる。
- ① **Ba型** 人面である。顔は上を向く。角の違いを基準に、独角 (Ba1) と双角 (Ba2) に細分化する。
- ② **Bb型** 獣面である。顔は前方を向く。すべて無角で、短く切り揃えた馬のような鬣が付く。なお、人面・獣面ともに、前期のものは体長20～25cmほどであるが、後期には急に小型化



し、18cmほどになる。時期的変化を考慮して、2式に分ける。

1式 人面のものには三角形の頭髪がある(7・8)。

2式 1式の頭髪は独角に変化し、体が急速に小型化する(9・10)。

以上、Ⅱ類「蹲踞型」とⅢ類「伏臥型」の分類を行った。次にこの分類に立脚して、両類の編年と分布の検討を行いたい。

#### 4. 編年と分布

Ⅱ類「蹲踞型」・Ⅲ類「伏臥型」の鎮墓獣の時期的変遷は、4期に区分して捉えることができる。分布に関しては、主として北方の5地域(関中・寧夏固原地区、雲代地区、洛陽地区、鄴城地区、晋陽地区)で流行した。

##### (1) I期(450～500年頃、北魏遷都前)

本期における鎮墓獣の分布は、関中・寧夏固原地区と雲代地区に集中する。「過渡型AⅠ」、「過渡型AⅡ」、Ⅱ類「蹲踞型」のA型が流行する。

まず、450年頃、十六国末期～北朝初期に、関中地区で過渡型AⅠ(1・2)が出現する。Ⅰ類「四足歩行型」とⅡ類「蹲踞型」のいずれともいえる。うずくまるような姿態は、四足歩行型から蹲踞型への過渡的形態と考えられる。

「過渡型AⅠ」にやや後出する470年頃に、北魏平城で人面の「過渡型AⅡ」(20左)が出現した。それは四足で立つ姿をとるが、台座に乗る造形はⅠ類「四足歩行型」に見られない新たな要素である。「過渡型AⅡ」とペアになって配置されるⅡAb型(20右)は蹲踞型に変化する。また、480年頃になると、人面蹲踞型のⅡAa型(19)も出現する。これは人面の「過渡型AⅡ」を継承したことが明白である。なお、「過渡型AⅠ」と「過渡型AⅡ」にはともに施釉技術が採用され、体表に鱗のような装飾があることから、両者には密接な関係があると推測できる。さらには、関中地区の「過渡型AⅠ」は雲代地区の「過渡型AⅡ」に強い影響を与えたと考えられる。

##### (2) II期(500～540年頃、北魏遷都後～東魏・西魏分裂期)

本期になると、鎮墓獣の分布は関中と洛陽地区に集中するようになる。特にⅡ類「蹲踞型」のB型、Ⅲ類「伏臥型」のA型およびB型が流行する。

関中地区では、I期の「過渡型AⅠ」が姿を消し、同時期の洛陽地区で流行していたⅡ類「蹲踞型」も見られず、他地域にないⅢ類「伏臥型」(3～12、18)鎮墓獣が採用される。この「伏臥型」鎮墓獣は、当初は獣面のものをペアにして副葬されたが(3・4)、534年頃には獣面と人面に分化した(5・6)。

一方、雲代地区においては、北魏遷都前に流行していた「過渡型AⅡ」のⅡAa型およびⅡAb型が姿を消す。520年以降に、洛陽地区ではⅡB型(22～26)が新たに登場する。ⅡBa型は尖った帽子を被っており、ⅡAa型の影響を受けた可能性がある。ⅡBb型は破損が激しい資料が多いため詳細は判然としないが、ⅡAb型とかなり類似するところから見ると、遷都前のものの影響を受けていることが明らかである。

その他、本期の鄴城地区では、鎮墓獸は僅か2基の墓からしか発見されておらず、その形状は洛陽地区のⅡB型と同類であり、洛陽から購入したものと考えられる<sup>4)</sup>。534年に北魏は東魏と西魏に分裂し、東魏が鄴城に遷都する以前の10余年は、鄴城地区において鎮墓獸の副葬は珍しく、当地にはまだ工房がないことが明らかである。

しかし、このような状況は、東魏の鄴城遷都にともない一変する。すなわち、洛陽の鎮墓獸が鄴城地区に伝播し、当地区で最初の作例である磁県元祐墓（537年）から出土した鎮墓獸（30）は、洛陽地区のⅡBa型から鄴城地区のⅡCa型の移行期的な形態である。これを橋渡しに、当地区では540年頃に、洛陽地区の伝統であったⅡB型鎮墓獸を基礎として、ⅡC型鎮墓獸（31～33）が新たに創出された。

### （3）Ⅲ期（540～580年頃、東魏・北齊、西魏・北周）

本期において、鎮墓獸は主に関中・寧夏固原、鄴城、晋陽の3地区に集中する。ⅢB型、ⅡC型、ⅡD型の鎮墓獸が流行する。

まず関中地区において、ⅢA鎮墓獸が姿を消す。そして540年頃以降に、Ⅱ期の人面の伏臥型（5）が、以前の三角形髪から独角に変化する（7・8）。さらに、本期の末期に至ると、双角の造形も出現する（9～12左、18左）。

鄴城地区ではⅡC型（27・28、31～33）が流行する。ⅡC型はⅡB型に似るが、脚は太くなり、胸が前方に突出する形状は後者とかなり異なる。また本期の末期になると、ⅡC型に戟状の鬣が配されるようになる。これは画期的な変化といえる（33）。

さらに、ⅡC型鎮墓獸は鄴城以外の地区にも拡散する。北齊の別都である晋陽地区に転入し、晋陽の地域色をそなえるⅡD型鎮墓獸（34～36）が創出され、ⅡCa型鎮墓獸の頭部に特有の円柱状突起飾りが、尖った兜に変化する。また晋陽地区では、馬の蹄のような特有の爪先の表現が出現するが、これも画期的な変化である。なお、ⅡC型では3本の鬣が整然と配されていたが、ⅡD型の背上の鬣は多数化し、分岐した形状を呈するものに変化する。

### （4）Ⅳ期（580～620年頃、隋）

本期における鎮墓獸の分布は関中、安陽、晋陽の3地区に集中する。ⅡE型とⅡC型が流行する。まず、関中地区に特有であったⅢ類「伏臥型」は、本期にはすでに姿を消している。代わってⅡ類「蹲踞型」鎮墓獸の2類型が併存する。一つはⅡE型（13～15）鎮墓獸である。蹲踞型を呈するが、体軀は豊満で丸々としており、背中に鬣がない。その形状はⅡC型鎮墓獸とかなり異なっている。もう一つは鄴城地区のⅡC型の造形にほぼ一致するものであるが、ただし背中の鬣は3本から2本になっている。

また、本期から鄴城地区の鎮墓獸が急減してゆく。磁県のⅡC型は姿を消し、安陽のみに若干のⅡC型が残存する。その形状は安陽ⅡC型の伝統を保ちつつも、その制作工芸および造形が飛躍的な進歩を遂げている。その代表例は、隋時代の安陽張盛墓の出土品である（29）。これを基礎にして、唐代の華麗な三彩鎮墓獸が創出され、鎮墓獸の造形芸術は頂点に達したのである。

その他、晋陽地区の鎮墓獸は鄴城地区と同様に、隋時代にも少し残存するが、東魏・北齊の経済および文化の中心であった鄴城と晋陽地区は、隋唐王朝が新たに到来するとともに、急速に消失していった。

## 結 語

以上、Ⅱ類「蹲踞型」とⅢ類「伏臥型」鎮墓獸の分類・編年・分布を検討した。最後に、それらの成立と展開について、少し触れてみたい。

Ⅱ類「蹲踞型」とⅢ類「伏臥型」鎮墓獸は、漢時代から出現したⅠ類「四足歩行型」鎮墓獸と比べて、その姿勢の変化も配置方式も画期的な変革が起こった。姿勢は「四足歩行型」から「蹲踞型」になる。一方、配置は1基1体の獸面獸身から、1基2体の獸面獸身・人面獸身のペア配置になる。この変化が一体いつ、どこで発生したのか、またそれらがどのように成立し、展開したのか、興味深い問題である。

この問題の解明するためには、まずⅠ類とⅡ類の間に認められる「過渡型」鎮墓獸に注目すべきである。十六国末期～北朝初期に陝西省で出現した「過渡型 A I」には、台座が現れており、画期的な変化といえる(1・2)。これはⅠ類「四足歩行型」に見られない造形要素である。また、「過渡型 A I」は獸面でなく、人面と獸面の両方の特徴が共存しており、「半人半獸面」と称しうるものである。

北魏時代になると、「過渡型 A I」にやや後出する470年頃に、平城で「過渡型 A II」が出現する。本類型は、完全な人面となっている(20左)。興味深いことに、「過渡型 A II」とペアで配置されたのは、獸面であった(20右)。このような配置から、人面と獸面が未分化であった「半人半獸面」の「過渡型 A I」は、北魏平城時代以降に人面と獸面に分化したことが窺える。したがって、人面と獸面をペアで配置する方式は、北魏平城時代の遅くとも470年頃にはすでに成立したと判断できる。人面に似た鎮墓獸は、三国・呉時代に遡るが<sup>5)</sup>、本格的な人面鎮墓獸は北魏平城時代までに出現したと考えられる。

「過渡型 A1」は、北方の西晋Ⅰ類「四足歩行型」と南方の南朝Ⅰ類「四足歩行型」鎮墓獸の両方からの影響が生んだものと考えられる。「過渡型 A II」には、「過渡型 A1」と南朝Ⅰ類「四足歩行型」鎮墓獸の影響も見出せる<sup>6)</sup>。両者の台座に乗る姿は、十六国時代に關中地区で大量に出現した騎馬俑と伎楽俑の両方に台座が付くことから、關中地区で流行した形状と考えられる。

この形状に、まず關中地区の鎮墓獸が吸収されて「過渡型 A1」が創出された。さらに雲代地区に伝播し、大同の「過渡型 A2」が出現した。そして「過渡型 A II」は「過渡型 A1」を土台として、南方のⅠ類「四足歩行型」人面鎮墓獸の人面形を吸収しながら、鮮卑民族風のものが創出された。実際、南方の漢民族の顔から、胡族の顔へと変化していることが窺える。また、馬のような体軀と人間の頭を巧妙に組み合わせており、画期的な変化といえる。

しかし、關中地区の「過渡型 A1」と雲代地区の「過渡型 A II」は、それぞれ別の道を歩んでゆく。両者とも「過渡型 A1」を基礎として展開した類型であるが、しかし關中・寧夏固原地区でⅢ類「伏臥型」が創出された一方、雲代地区ではそれと全く異なるⅡ類「蹲踞型」が創出された。前者は北魏から北周にかけて、關中・寧夏固原でのみ流行したが、後者は北朝時代に、雲代地区→洛陽地区→鄴城地区→晋陽地区という広域にわたって、伝播と発展を遂げた。このようにⅡ類「蹲踞型」鎮墓獸は、Ⅲ類「伏臥型」鎮墓獸に比べ、流行した時空間の範囲が遥かに上回っている。Ⅰ類「四足歩行型」鎮墓獸に代わり、北朝時代から隋唐以降にかけても依然として盛行し続けたのである。



## 謝辞

本稿の執筆にあたり、和田晴吾氏、木立雅朗氏、下垣仁志氏、原田昌浩氏、山本晃平氏等に多くのご指導・ご協力を得ている。記して感謝の意を表したい。なお、本稿の作成にあつては、中国国家留学基金の援助を得た。

## 注

- 1) 従来、楚墓から出土する頭部に鹿角を有する木彫怪獣は「鎮墓獸」と呼ばれ、中国最古の鎮墓獸と認識されている。しかし、それらは、体軀が明確に動物でも人形でもなく、「俑」と「獸」のいずれかに截然と分属させ難い。それゆえ、楚のものは「鎮墓獸」ではなく、未分化段階のものであり、「俑」と「獸」より、「神」という属性が多くから、「鎮墓神」と称している（張成 2013a）。そうすると、最古の鎮墓獸は春秋時代から出現した楚墓のものではなく、漢代に出現した「四足歩行型」鎮墓獸であるといえる。
- 2) 筆者は、中国古代墓葬の主流である鎮墓品を「鎮墓像」と総称し、さらにその「鎮墓像」を3類に分け、即ち「鎮墓神」、「鎮墓獸」と「鎮墓俑」とした。なかでも、鎮墓獸は体軀姿勢によって、Ⅰ類「四足歩行型」、Ⅱ類「蹲踞型」、Ⅲ類「伏臥型」に分ける（張成 2013a）。
- 3) 吉村氏は楚墓から出土した、従来「鎮墓獸」と称されてきたものを「楚鎮墓像」と命名したが、依然としてそれを鎮墓獸の一種類と分類した。筆者は、後世の本格的な「鎮墓獸」とはっきり区別するため、それを「鎮墓神」と称する。そして注2の提示のように、楚墓の「鎮墓神」と後世の「鎮墓獸」・「鎮墓俑」を「鎮墓像」と総称する。
- 4) 河北省曲陽県の高氏墓は、洛陽の侯掌墓と同じ正光5年（524年）の紀年墓である。高氏墓出土の鎮墓獸は侯掌墓のものと同様に類似している。また、高氏墓は侯掌墓出土の武士俑、女俑と類似し、洛陽で製作されたものがもたらされた可能性が高い。その他、河北省の呉橋北魏墓、山東省の崔鴻夫婦墓、賈思伯夫婦墓からも、類似した鎮墓獸・鎮墓武士俑、男俑が出土している。小林氏は、侯掌墓出土の陶俑は、洛陽北魏陶俑でも比較的早い時期、即ち520年代中葉に規格化された様式を代表するものであり、それが洛陽以外の近隣諸地域の陶俑へも大きな影響を与えていたということをすでに指摘している（小林 2002a）。
- 5) 中国の南方では、三国の呉墓から人面に似る「四足歩行型」鎮墓獸が、以下に挙例する墓葬から出土している。武昌蓮溪寺東呉墓（湖北省文物管理委員会 1959「武昌蓮溪寺東呉墓清理簡報」『考古』4期）、湖北鄂州鄂鋼飲料廠 M1（鄂州博物館等 1998「湖北鄂州鄂鋼飲料廠一号墓發掘報告」『考古学報』1期）、安徽馬鞍山市佳山東呉墓（安徽省文物考古研究所 1986「安徽馬鞍山市佳山東呉墓清理簡報」『考古』5期）。
- 6) 筆者は別稿で、「過渡型 A I」および「過渡型 A II」とⅠ類「四足歩行型」の影響関係について検討した（張成 2013a）。その要因を簡単にまとめると、以下のようになる。①「過渡型 A I」は、3本の角（鬣）や背中の瘤状装飾などが、明白に北方Ⅱ類「四足歩行型」の影響を受けている。また、背中の両側に配される尖った角のような装飾は、南朝の鎮墓獸と共通する。なお、北方ではあまり見られない施釉技術を使用し、これも南方地域からの影響と考えられる。したがって、「過渡型 A I」鎮墓獸は、南北双方の影響を受けて形成されたものである。②「過渡型 A II」の人面の造形は、Ⅰ類「四足歩行型」人面鎮墓獸の影響を受けている可能性もある。また、「過渡型 A II」も施釉技術を使用し、南方地域からの影響と考えられる。

## 参考文献

（日本 五十音順）

小林仁 2002「洛陽北魏陶俑の成立とその展開」『美學美術史論集』（14）

小林仁 2006「中国南北朝時代における南北境界地域の陶俑について-「漢水流域様式」試論-」『中国考古学』（6）

小林仁 2008「中国北齊時代の俑に見る二大様式の成立とその意義-鄴と晋陽-」『佛教芸術』（297）

室山留美子 2003「北朝隋唐墓の人頭・獸頭獸身像の考察-歴史的・地域的分析-」『大阪市立大学東洋試論叢』

吉村菫子 1993「楚墓鎮墓像の成立と展開」『東京国立博物館研究誌』（512）

吉村菫子 2003「中国墓葬における独角系鎮墓獸の系譜」『東京国立博物館研究誌』（583）



吉村 苜子 2012 「中国墓葬における人面・獣面鎮墓獸と鎮墓武士俑の成立」『東京国立博物館研究誌』(638)

(中国ピンイン順)

倪潤安 2002 「西魏北周墓葬の発見と研究述評」『考古与文物』5期

倪潤安 2005 「北周墓葬俑群研究」『考古学報』1期

倪潤安 2008 「北周墓葬の地下区間と施設」『故宮博物院院刊』1期

倪潤安 2010 「北魏洛陽時代墓葬文化分析」『故宮博物院院刊』4期

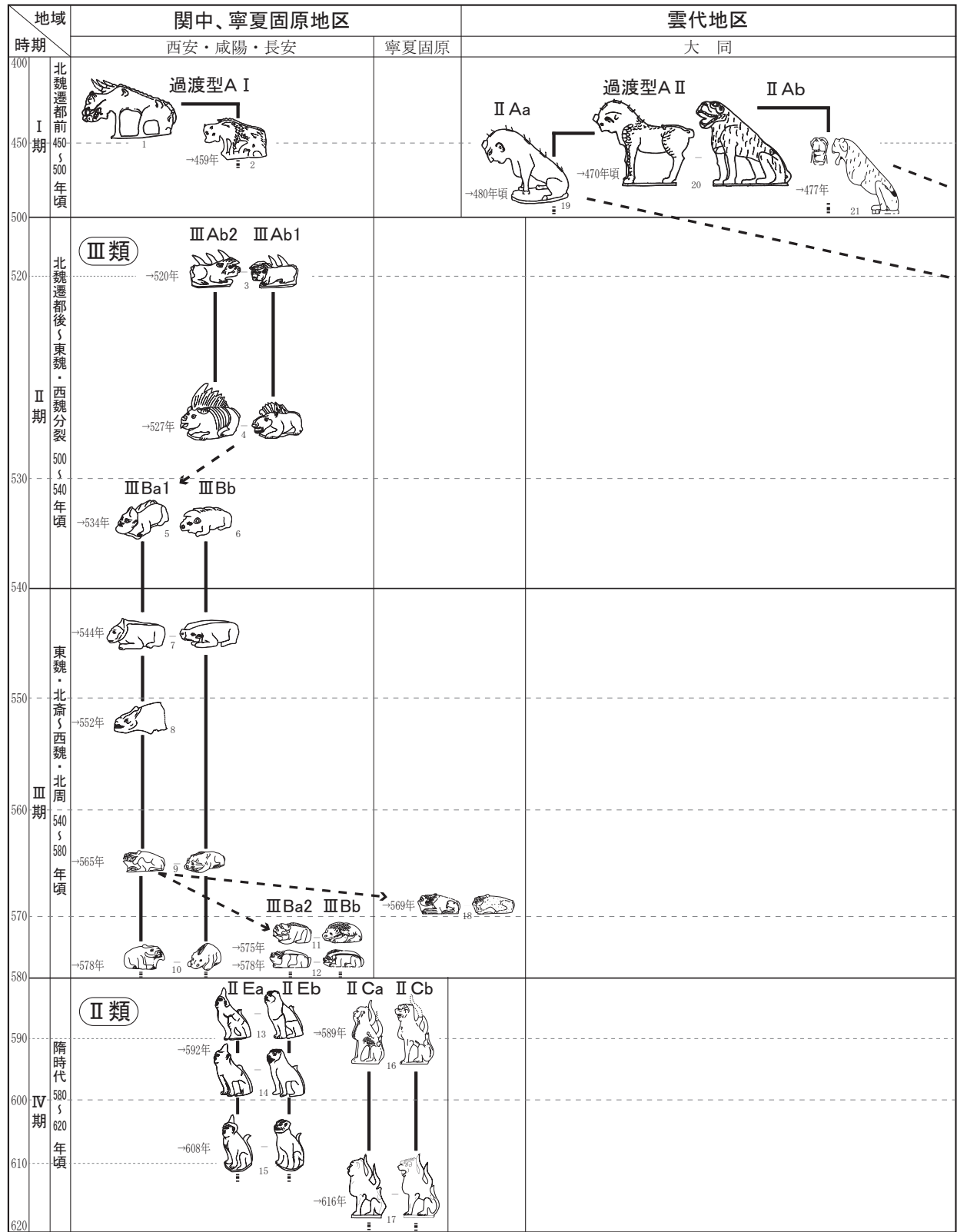
魏青利 2007 「東魏北齊時期陶俑の研究」鄭州大学修士論文

楊效俊 2000 「東魏、北齊墓葬の考古学研究」『考古与文物』5期

張成 2013a 「中国古代鎮墓獸の基礎的研究(一)-I類「四足歩行型」鎮墓獸を中心に-」『立命館大学考古学論集VI』立命館大学考古学論集刊行会

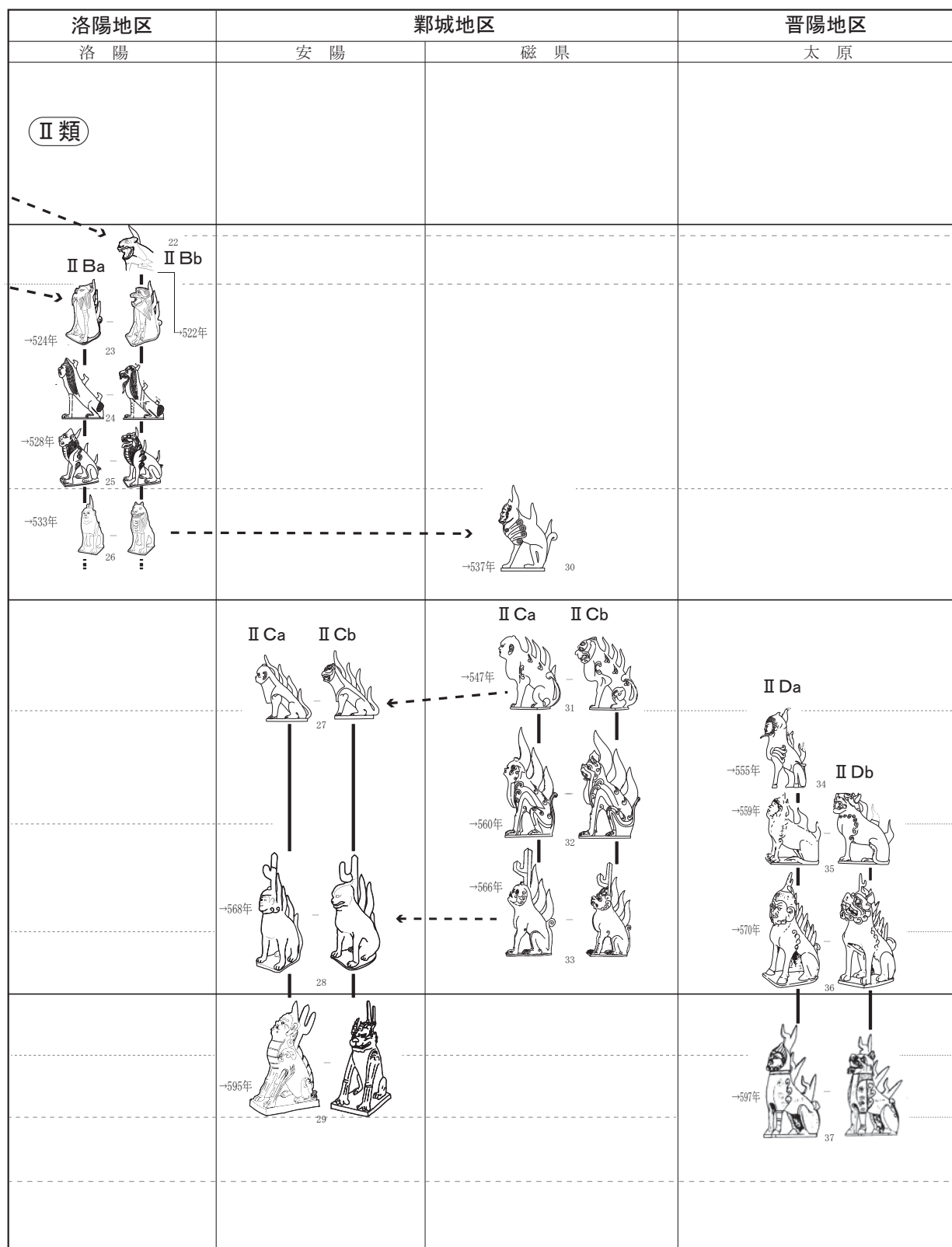
張成 2013b 「中国古代墓葬出土的鎮墓神像-以命名、分類及其体系問題為中心-」『考古与文物』(2013年掲載予定)

(本学大学院博士後期課程)



編年図 II 類・III 類鎮墓獸編年

- |                      |                      |                        |
|----------------------|----------------------|------------------------|
| 1. 西安北郊北朝墓XDYM217    | 8. 陝西藍田西魏墓 (552年)    | 15. 西安李静訓墓 (608年)      |
| 2. 長安県偉曲鎮偉君墓 (459年)  | 9. 陝西咸陽董榮暉墓 (565年)   | 16. 隋宋忻夫婦合葬墓 (589年)    |
| 3. 西安任家口紹真墓 (520年)   | 10. 咸陽若乾雲墓 (578年)    | 17. 隋呂思礼夫婦合葬墓 (616年)   |
| 4. 長安偉或夫婦墓 (527年)    | 11. 咸陽叱羅協墓 (575年)    | 18. 寧夏固原李賢夫婦合葬墓 (569年) |
| 5. 西安偉乾墓 (534年)      | 12. 咸陽孤独藏墓 (565年)    | 19. 大同司馬金龜墓 (480年)     |
| 6. 西安偉輝和墓 (534年)     | 13. 陝西長安南裡王村M14      | 20. 大同雁北師院M2           |
| 7. 咸陽胡家溝西魏侯義墓 (544年) | 14. 西安呂武墓M586 (592年) | 21. 大同宋紹祖墓 (477年)      |



縮尺1/25 (図中の矢印「→」の位置がその鎮墓獣の年代を示す)

22. 洛陽郭定興墓 (522年)  
 23. 河北曲陽高氏墓 (524年)  
 (洛陽購入)  
 24. 偃師前杜樓北魏石棺墓M1  
 25. 洛陽北魏元邵墓 (528)  
 26. 洛陽北魏楊機墓 (533)  
 27. 安陽市固岸墓地II区M51

28. 安陽和紹隆夫婦合葬墓(568年)  
 29. 安陽隋張盛墓(595年)  
 30. 磁県元祐墓 (537年)  
 31. 磁県東陳村趙胡仁墓 (547年)  
 32. 磁県湾漳北朝壁画墓 (560年)  
 33. 磁県北陳村堯峻墓 (566年)  
 34. 太原西南郊北齋洞室墓(555年)

35. 太原北齋洞室墓TM85 (559年)  
 36. 太原市北齋娄睿墓 (570年)  
 37. 太原隋斛律徹墓(597年)